

往年の名優たちが蘇る

上映日

平成29年1月8日(日)
平成29年1月9日(月)

場所

益城町文化会館 ホール

入場料

無料

*就学前のお子様のご入場はご遠慮ください。

嵐を呼ぶ男/101分

[1957年 日活]

出演：石原裕次郎/北原三枝/金子信雄/芦川いづみ/白木マリ/青山恭二 ほか

解説

実兄・石原新慎太郎の小説を映画化した「太陽の季節」(1956)でデビューした石原裕次郎は、「狂った果実」(1956)や「乳母車」(1956)などの話題作に出演し着実にスターの道を歩み始めた。港町を舞台にした「俺は待ってるぜ」(1957、藤原惟雄監督)では、「ここではないどこか」を求めた孤独な青年を、甘い感傷を交えて演じ、自らのイメージをスクリーン上に描き出した。また同名の主題歌もヒットさせ、歌う映画スターとしての出発とした。本作はその裕次郎のイメージを決定的にした記念碑的な作品である。1958年の正月映画として公開され、総配収3億5,600万円(当時の平均入場料62円)を超える大ヒット。監督の井上梅次は新東宝からの移籍組だが、裕次郎が指を負傷してドラマを叩くことができず、とっさにマイクを握って歌い始めるというツボを押さえた演出で観客を魅了させ、一代スターの誕生を導き出した。



上映日時

1月8日(日) 13:30~

暁の脱走/110分

[1950年 新東宝]

出演：池部良/小沢栄/山口淑子/伊豆肇/田中春男/柳谷寛/清川莊司 ほか

解説

田村泰次郎による人気小説「春婦伝」を、監督の谷口千吉が映画化した戦後反戦映画の代表作。敗戦間近の中国戦線に激しい恋に落ちた上等兵の三上(池部良)と慰問団の歌手・春美(山口淑子)は、敵の捕虜となって送り還されてくる。二人を迎えたのは数々の汚名と上官の嫉妬。軍曹の助けを借り、部隊からの脱走を試みる二人に、残酷な結末が待ち受けていた。谷口と黒澤明が共同で執筆した初稿シナリオは占領軍の検閲官により何度も書き直しを命じられ、難産の上に完成を見た作品であったが、満洲映画協会のスター「李香蘭」として活躍していた山口をはじめ、中国で捕虜になった谷口、中国戦線に従軍していた池部、田村と、外地での体験を持つスタッフ・キャストの結集により、日本軍の非人道的な階級制度を激しく糾弾する野心作となった。翌年のカンヌ映画祭へ出品されると共に、香港および東南アジア諸国に輸出された戦後初の日本映画である。



上映日時

1月8日(日) 15:30~

隠し砦の三悪人/138分

[1958年 東宝]

出演：三船敏郎/上原美佐/千秋實/藤原釜足/藤田進/志村喬/樋口敏子 ほか

解説

時は戦国時代。隣国との戦いに敗れた秋月家の侍大将(三船敏郎)は残された姫を擁し、隠しておいた軍用金を握りだして、敵中突破を図ろうとしていた。同盟国に脱出するためである。二人の百姓を狂言まわしに使い、お家再興にまつわる宝探し、敵中横断にともなう追っかけなどを盛り込んだ作品。襲いかかるさまざまな難関、手に汗握るスリリングな場面が連続する。そのようなシチュエーションをいかに面白く組み立てるかに三人の脚本家、菊島隆三、小国英雄、橋本忍と黒澤明は大いに知恵を絞ったという。観客を決して飽きませないという決意のようなものがうかがえるシナリオである。この映画が製作された1958年は、映画入場者数が史上最高の11億2745億人を数えた都市である。この時、映画は文字とおり大衆娯楽の王者であり、この作品は、まさにその記念すべき年にふさわしい作品であった。1959年ベルリン国際映画監督賞、国際映画批評家賞を受賞。



上映日時

1月9日(月) 10:00~

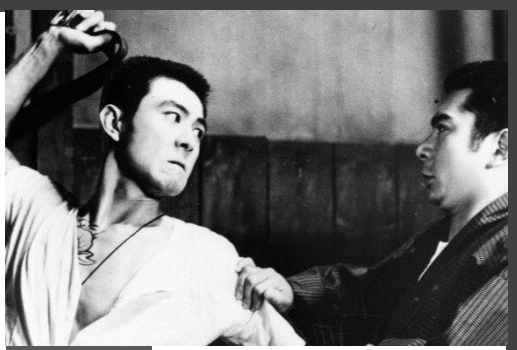
悪名/94分

[1961年 大映(京都)]

出演：勝新太郎/田宮二郎/中村玉緒/水谷良重/中田康子/千葉敏郎/永田靖 ほか

解説

喧嘩は強いが情けには弱い痛快無類の好男子、八尾の朝吉(勝新太郎)の活躍を描いた娯楽映画。威勢のいい河内弁と激しいアクションで話題を読んだ。今東光の人気小説を大映京都撮影所のスタッフ・キャストが見事なチームワークで映画化している。監督の田中徳三、脚本の依田義賢、カメラの宮川一夫、美術の内藤昭、照明の岡本健一、録音の大谷蔵らは、日本映画の巨匠として知られる。溝口健二監督の諸作品を支えた一流のスタッフである。セット、照明、撮影のコンビネーション、画面の隅々まで行き届いたその技術力を堪能することができるだろう。撮影所という夢の工場が十分に機能していたことを知ることができるとも、一篇でもある。モートルの貞を演じた田宮二郎と勝新太郎のコンビも絶妙で興行的にも大ヒット、本作品以降もシリーズ化された名作である。



上映日時

1月9日(月) 12:40~